

大人が絵本を 第66回 医療法人 元気が湧く



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*

小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事ファウンダー

司書がAIになる!!!!!!

「近い将来、司書の仕事は人工知能(AI)で代替可能になる」¹⁾。

国権の最高機関である「国会」での衝撃的な発言はあっという間に巻の話題となりました。肥田美代子氏が理事長を務める「文字・活字文化推進機構」の働きかけを発端とする、学校司書の配置増を求めた国会決議案が、党派を超えて賛同を得られたなか、1党の反対により全会一致の合意に至らず、成立は見送られてしまいました。その反対理由で「AI」と述べたのです。

人生をより深く生きる力を身につける文字・活字文化環境を脅かす危機的状況が、近い将来にまで迫りつつあるのかと、新しい時代が始まったばかりのこの国の行く末に慄きを感じた出来事です。

図書館運営の軸は、「本」よりも「人」

図書館の3大構成要素は、「本」「建物」「人」と言われています。図書館学を専攻する最初の講義で、司書を志す者たちにその覚悟を問うてくる理論です。すなわち、「すぐれたサービスを提供できたとして、そのときの貢献度は図書館資料のすばらしさ20%、物理的な施設・設備のよしあしが5%、図書館職員の仕事ぶりが75%を占める」とされているのです²⁾。

「コンピュータやインターネットが発達しても、複合的な情報提供は人間にしかできず、専門的能力と柔軟な思考や実行力をもった図書館職員が担うもの」とは、数々の新図書館設立に携わり、昨年3月、和歌山大学図書館長を退職された渡部幹雄氏が事あるごとに述べてきた図書館論です³⁾。どんなに時代が変わろうとも、「人」の占める普遍的重要性を図書

館は持ち、その理念と蓄積を持った司書がいる図書館こそ、質の高いサービスを備えているということなのです。

図書館実務とは、マニュアル化できるほど単純なものではありません。電子機器の発達により、平成時代の図書館から目録・貸出カードや原簿などの紙媒体が消え、電子化が実現しました。さらに平成の後半には貸出・返却業務も自動化され、図書館のIT化は加速的に整備されています。しかしそれは、情報テクノロジーが司書に代わって仕事をすることではなく、人間の仕事をサポートする存在であり、システム化によって司書が最も専門的な業務に専念し、その能率と精度を上げるということなのです。

ICTの活用により、ユーザー一人ひとりに寄り添って、その人の個性をキャッチしながらニーズに応じた情報提供に当たる実務は、人間である司書にしかできないサービスなのです。司書は、個々人と本(情報)を結びつけるコンサルティングの役目をもつアドバイザーです。AIに、理論としての「読書の発達段階」を組み込むことは可能でしょうが、果たして、個体差のある個々人の発達に応じた支援がどこまでできるのでしょうか。電子メディアの時代に、反知性主義な社会に向かうことのないよう、司書自身が常に幅広い知識・技術の習得に努め、発信力を高めることで、社会的評価を底上げする必要がありますと強く感じます。

ヒトを介するからこそ発達する人間です

育児支援事業を兼ね備えた親子ライブラリー・ビブリオキッズ&ベイビーでは、本の受入や装備、配架などをAIが担う日が訪れたとしても、レファレンス業務と、読書相談・支援、そして人間同士の気

手にするときは！

“私たちの「願い」”

企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)

持ちの共有を軸とする読みあいが、人間ではないテクノロジーに取って代わる日はないと信じています。もしも訪れたとしたなら、そこには心も魂も存在せず、やがて人類が減りゆくときです。

絵本と親子の間に、人間の各発達段階を促進する絵本の知識を兼ね備えたヒトを介するから、その場に喜びの笑顔が伴われ、子育て渦中のお母様に元気が湧き、親子同士の絆、親子とスタッフの絆が深くなり、それが育児の活力になっているのだと、ビブリオキッズは提言します。特に、就学したビブリオっ子のお母様との長期的な交流によって富に感じるのです。それは、また私たちの経験の積み重ねとなり、さらに質の高いサービスへと発展させていたるところです。

単なる読書施設、情報館ではなく、その行為の間で司書という人間がサポートするからこそ、エンドユーザーが知識の整理を伴った情報探索活動を成立させているのです。人間と人間のやり取りによって、大人も子どもも互いに発達していく場となり得るのが学校図書館であり、私たち親子ライブラリーなのです。

文化事業にこめた“私たちの願い”とは

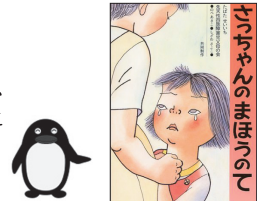
「絵本と図鑑の親子ライブラリー“ビブリオキッズ”と「医療法人元気が湧く」が、人間と人間の間に介在する絵本の魅力と効力を、広く多くの方々に共有していただきたいとした“私たちの「願い」”から創設した社会文化事業が「絵本の日」と、それから派生した「絵本の日アワード in FUKUOKA エピソード部門」です。最優秀賞1作品、優秀賞2作品、そして特別賞1作品を選び抜き、2回の表彰を行ってきた中で、光の当たることのなかった多数の作品

にも、新たな絵本の魅力と効力を受け止めてきました。第3回となった昨年は、優秀賞を「元気が湧く賞」「笑顔賞」に加え、新設した「絆賞」と合わせた全5作品が光輝きました。

それぞれの賞には、“私たちの「願い」”をこめた名称を持たせています。新設の「絆賞」には、こんな「願い」をこめました。「断絶するには忍びない恩愛とか、離れがたい情実が『絆』です。絵本には、その手助けをする“絵本力”があります。“エピソード”が、『絆』を教えてくれるとの“私たちの『願い』”です」。

2019年の絆賞には、先天性四肢障がい^{おなぎ}で右手の指が2本の女の子が主人公の絵本『さっちゃんのまほうのて』による小榎 忍 様の作品が輝きました。

『さっちゃんのまほうのて』
たばた せいいち、
先天性四肢障害児父母の会、
のべ あきこ、しざわ ようこ
共同制作(偕成社)



この絵本は、「先天性四肢障害児父母の会」が「わが子や周囲に障がいをどう伝えるか」という悩みに答えるために企画し、絵本作家の田畑精一氏に制作を依頼して1985年、偕成社から出版されたロングセラーで、今年2020年は45周年のアニバーサリーイヤーです⁴⁾。では、絆賞を受賞した小榎様と、本書の出会いをお聞き下さい。

絵本の日アワード「絆賞」がつなぐ願い

受賞者……小榎 忍 様(千葉県)

妻は子連れで帰ったが、私は席を立てなかった。診断後の待合室には走り回る子もいたけれど、



私には全てが遠い映像のように思えた。これから数十年にわたるであろうわが子の苦勞、そしておれの負担。私は消えてなくなりたいと心から思った。何時間たっただろうか。夜間照明に気がついて、私は顔をあげた。フロアにはもう誰もいない。難病を見抜いた病院だけあって、施設は充実しており、書架もある。私はぼんやりしたまま、一番手前の絵本を手を取った。
～以下、略～

小椰様ご自身が体験されたエピソードの記述はここまでです。お子様が難病と診断された日の大切な出来事を、絵本の日アワードに寄稿して下さいました。病気を宣告された日、全身に大きな衝撃が走ったことが伺えます。その時に出会った一冊の絵本は、小椰様のやり場のない感情を、ふうわりふわりと包んでくれたのだと思います。

ご自身の体験談はこの冒頭だけで、以後、絵本の内容と、読んだその時に感じた思いが綴られています。

病気の障害を治せないまでも、苦しむ人々が前を向く余地をつくることはできる。伸ばせない指があるなら、周囲が伸ばせる場所をつくれればよいのだ。私の役割はある。
(小椰 忍 様)



体験談後の残る3分の2の文章で、絵本の感想を述べているようでいて、それらはすべて重なり合ったご自身の心を投影しているのです。いいえ、本当のところは分かりません。お子様が何歳のときのことで、現在どうされているのか、もしかしたらここ最近の出来事なのかもしれません。それが分からなくても、私たちには計り知ることのできない体験をされていることが伺えるのです。小椰様ご家族が天から与えられた出来事は、小椰家だけの大切なメモリーです。それを語らずとも苦悩のどん底にいるときに、一冊の絵本が支えとなったことがひしひしと伝わってくるのです。

エピソード投稿者のすべてを告白しなくても伝わりくる力強いメッセージに、私たちはまた、新しい「絵本の力」、そして「恩愛の絆」を知ることができました。



創り手と読み手の願いが重なり合うとき

『さっちゃんのまほうのて』の執筆を、「先天性四肢障害児父母の会」代表の野辺明子氏らより依頼された田畑精一氏ははじめ、尻込みしたのだそうです。しかし、「父母の会」のイベントに参加して、子どもたちや保護者らと交流するうちに、障がいを持つ子どもをしっかりと受け止め、支え続ける保護者の強い愛情を知るようになり、「明るく希望を抱ける作品」にしようと制作を決心するのです⁴⁾。

共同制作者である「父母の会」と田畑氏それぞれが絵本にこめた願いを、そのままに受け止めたもうひとつのご家族様と、アワードを通して出会わせていただきました。『さっちゃんのまほうのて』は昨年、「絆賞」だけでなく「元気が湧く」賞にも輝き、「絵本の日アワード2019」優秀賞でダブル受賞絵本となったのです。

「元気が湧く賞」受賞者は、“さっちゃん”と同じように先天性四肢障がいの「合併症」を持って生まれた男の子のお母様である星野真美様(東京都)です。息子さんは、小さな身体で皮膚移植を繰り返して4才までに10本の指になったのですが、曲がらない指や皮膚移植の痕を残したままで、小学校に入ると他のクラスから自分を見にやってくるという体験をするのです。それを聞いた星野様は、教師と相談して『さっちゃんのまほうのて』を小学校の児童に向けて読んだのです。読んでいる最中、言葉につまると黙ってお母様の手を握ってくれた息子さんは、読み語りに続いて自らの手をみんなに向けて傷の説明をするのですが、その日以来、見に来る子はいなくなったというエピソードです。絵本制作の願いのまま、効力を発揮しているのです。

人から人へ拡散される絵本の力がここに!

優秀賞のひとつ「元気が湧く」賞は、主催母体である私たち医療法人の名称です。“エピソード”から新しい“気付き”をいただき、その“気付き”から元気が生み出され、大きくなる。そんな“私たちの「願い」”が「元気が湧く賞」にあるのです。

息子さんの苦悩をしっかり受け止め支えようとした星野様でしたが、逆に息子さんに支えられることになりました。文面では綴られていませんが、息子さんが病気に負けない強い精神力とやさしい心をもって成長したことを感じ取った瞬間で、星野様ご自身が息子さんに救われた出来事だったのだと思います。そしてまた、星野様にも息子さんにも元気が生み出されたことが強く伝わってくるのです。星野様の読み語りの日から、星野様親子だけでなく、息子さんの通う小学校の子どもたちにも広く大きな元気が生まれたことも伺えますし、この800字のエピソードから私たちも、医療従事者としての在り方に気付きを与えられたのです。

同じ絵本材であっても、読む者のその時の境遇や感情によって絵本の力は様々に発揮されることを強く感じる「絆」の作品と、「元気が湧く」作品です。

大人と大人を笑顔に、ハッピーに!

笑顔は、嬉しい笑顔、驚きの笑顔、時には悲しい笑顔もありますが、絵本には、全部の笑顔を生み出す「絵本力」があります。悲しい“エピソード”でも、心を温かく包み込み、笑顔が生まれるといった“私たちの「願い」”もあるのです。それが「笑顔賞」です。

2019年の笑顔賞は、『ぐるんぱのようちえん』のエピソードを応募された大西賢様（東京都）が受賞しました。女性にお付き合いを申し込まれた大西様でしたが、自身が派遣社員であることを理由にお断りすると、相手の女性から贈られたもの、それが『ぐるんぱのようちえん』で、贈り主は妻だという

笑顔譚です。

『ぐるんぱのようちえん』

西内ミナミ 作
堀内誠一 絵
(福音館書店)



大西様ご夫妻の悲しい笑顔から始まった『ぐるんぱのようちえん』は、驚きの笑顔も嬉しい笑顔も温かく包み込み、幸せの笑顔をも生み出しているのです。

広がれ! 万人に巻き起これ! 絵本の力

絵本。それは子どもだけのものではありません。大人のためでもあるのです。幼少期における読書体験の蓄積が、その後の人生に大きく影響を及ぼし、大人が驚くべき効力を発揮するのです。大人と子どもの読書活動支援に当たる専門家は、司書という人間です。優れた司書と絆を持った親子はきっと、AI時代に人間らしく生きる術を備えられるものだと全国に発信します。

絵本の日アワード2019では、大人に湧き立つ絵本の力、親子に注がれた絵本の効力をひととき強く感じました。まだ、取り組み始めたばかりです。全国的にみると、絵本の力に気付いていない方々の方が多く存在すると思います。私たちの「願い」を届けるべく、より一層の活動を展開していく所存です。

すでに、「絵本の日アワード in FUKUOKA 2020」の応募を受け付けています。皆様方が体験された「絵本の力」をお話しして下さいますか。



文献

- 1) 一般社団法人共同通信社: 維新「司書はAIで代替可能」, KYODO HP <https://this.kiji.is> 2019/12/19
- 2) 藤野幸雄, 他: 図書館学入門, 有斐閣, 東京, p.8, 1997.
- 3) 渡部幹雄: 図書館の潮流と今後の展望, 未来の図書館研究所 第1回シンポジウム記録, pp.2-14, 2016.
- 4) 野辺明子: 本『さっちゃんのまほうのて』に込める思い (平成26年度公開講座報告), 宇都宮共和大学 子育て支援研究センター年報 第5号, pp.47-60, 2015.